

新俳句入門

萩原井泉水

荻原井泉水著

新俳句入門

有樂出版社

昭和二十四年十月一日印刷
昭和二十四年十月十日發行

新俳句入門

定價 百七拾圓
地方賣價 百七拾八圓

著者 荻原井泉水

發行者 山下秀雄

印刷者 佐藤儀三郎

印刷所 株式會社佐藤印刷所

東京都中央區銀座西一ノ三・實業ビル
發行所 有樂出版社

振替東京四〇一六番

まへがき

一、ほんたうにはじめて俳句といふものに指を染めてみたい、俳句といふものはどんなものか、どんな風に作つたらばいいものかと尋ねてゐる方に――

二、このごろ、俳句を作つてゐるが、なか／＼面白いものだ、もう少し身を入れて研究してみたい、そして、もう少し上手になりたいものだ、と考へてゐる方に――

三、俳句を作りだしてから數年になるが、この頃、トント行きづまつた氣がする。どうも自分でも張り合が無く、こんな事では駄目だと思ふ、これを何とか打開する道はないだらうか、と考へてゐる方に――

さういふ方の爲に、此の本は書いたものである。元來「入門」の書であるから、碎いて談し得るかぎり、碎いた談にしたのである。

これ以上、やさしく、これ以上解りやすく、談すことは出来まいといふ位に——それ故、老婆談義になつたところも少くないが——談したつもりである。

此書は、昭和十五年刊行されて以來數刷を重ねたものゝ、大戦争の動亂にけおされて絶版になつたまゝ久しかつた。人の心がやうやく平安の世界を求めるやうになつた今日、この再刊が要望されたことは著者としてもうれしい。で、今の時代として、全篇を通じて改訂すべきところを補正し、新に最後の三章を書きおろして追加した。初版のものよりも、まとまりが好くなつてゐると思ふ。

昭和二十四年八月

著 者

分類 番号	911.3	原簿番号	4992
著者 記号	0.25	登録	1952 年
巻冊 番号			4 月 19 日

装

幀

川
合
喜
二
郎

新俳句入門 内容

一	俳句に入る道	三
二	年齢・相手・職業	二一
三	言葉・言葉・言葉	一九
四	自然のころ	二八
五	光・水・肥料	三七
六	句作の心構へ	四六
七	見る・愛撫する	五四

一八	親しむ・融和する……………	六三
一九	生さる・生活する……………	七三
一〇	息——長さ……………	八二
一一	句切り——ふくみ……………	九三
一二	形——三角・四角……………	一〇七
一三	調べ——圓さ……………	一二二
一四	風呂敷の如く……………	一三六
一五	花鳥……………	一四七
一六	風景……………	一五九
一七	身邊……………	一七三

一八	句材・句體さまざま……………	一八六
一九	定型と自由律……………	二〇〇
二〇	自由なる氣持で……………	二一四
二一	自由といふこと……………	二三三
二二	自然・自己・自由……………	二三三
	あとがき……………	二四一

新
俳
句
入
門

俳句に入る道

「俳句を作つてみよう」といふ氣がおこる——だが、自分のやうな者に俳句が出来るだらうかと考へる——出来たにしても上手になれるだらうかと考へる……。

さう考へてゐる方に、私は申すのである。「俳句を作つてみよう」といふ氣がおこるといふことが「句ごろ」が湧いたといふことだ。心の中に「俳句の芽」が出たやうなものである。既に「芽」が出た以上は伸びるに違ひない、枝葉が出るに違ひない。さうして花が咲くに違ひない。だが、好い花が咲くかどうか、それは各自の丹精^{たんせい}の仕方一つである。つまり、「上手になれるだらうか」どうかは各自の勉強一つである。

そこで「上手」といふことに就て一言したい。俳句に限らず何の道にしたところで、いつまでも上達しなくてはイヤになる譯だが、早く上達しようとすればかりに^{あせ}るの間違である。諺に「好きこそ物の上手なれ」といふ、「好き」だから「身」を入れて「勉強」

する。よく勉強するから「上達」する、といふ三段論法の歸結である。然し、私はその結果たる「上手」よりも、平生の「好き」の方に重きを置きたい。俳句で云へば、俳句好きになることである。俳句を作りはじめてから、十年二十年と長い間、作つてゐる人であつて、左程進歩もしないものゝ、しかも倦きないで作りつづけてゐる人がよくある。かういふ人は「俳句好き」なのである。「上手」とか「下手」とかいふことにかかはらず、やめられない位に、俳句といふ物が其人の「身」についてしまつたのである。俳句を作つてゐることが楽しいのである、俳句なくては居られないのである。これは確かに一得である。其人にとつて、俳句を知つたといふことが「いい事」をしたのである。これは俳句の「上手」になることよりも、更に「いい事」だといつてよろしい。だから、「好き」になる事が第一である。世に「食はず嫌ひ」といふ言葉がある。好き嫌ひはまづ箸をとつてみなければならぬ。一見して、自分の齒に合ひさうもないと思はれる物でも、噛みしめてみると味が出てくる。先づ、味つてみることである。いろ／＼と味つてみても、どうにも好きになれない、といふ事ならば、それは其人の「質」にあはないのだから致し方がない。だ

が、俳句だとても一種類ではない。さまざまの俳句があるのだから、其中で自分の「質」に合ふものも見出されるであらう。さうして、それが「好き」になつたといふことは、自分の心の「糧」になつたといふことである。食物だとして同じで、好きな食品は榮養になり、嫌ひなものは榮養にならない道理だ。俳句が「好き」になる、俳句が「身につく」といふことは「根」をおろすといふ事でもある。好く「根」がおりて居れば、其草はきつと好く生長する。早く伸びよ伸びよと、引つばるやうに考へるよりも、深く深く根をおろせ、といふ風にするのが正しい育て方である。大きな花を咲かせよう、とばかり考へて、肥料をむやみと施して、枯らしてしまふ場合もある。凡て、「功」をあせるのは宜しくない。「根」を枯らさぬやうにして、それが「自然」にもたらすものを待つのが本當である。早く「上手」にならうとばかり考へることもどうかと思ふ。「上手」「下手」を忘れて、「根」をふかく入れようとするのが肝腎である。

「俳句を作つてみよう」といふ氣がおこる、其動機にはさまざまあらう。新聞雑誌に載つてゐる句を見て一寸面白いなと思つた事から——友達に、どうだい、かういふものを作つ

てみたらばと勧められた事から——勤め先に俳句の會があつて、誰も彼も出るから——其動機はさまざまあらう。どういふ動機から入つたとて差支ない。それは俳句に入る道の機縁になつたものだから、その機縁は謝すべきものである。だが、俳句の道に入る時の、第一の心得として、俳句は自分の爲のものだ、大勢寄つて遊ぶものではない、結局は自分獨りであるものだ、といふことは、しつかりと心得てゐて貰ひたいと思ふ。

世間には、俳句といふものを、社交の道具と考へてゐる人も多い。或役所の或課の課長が俳句を作る、部下を集めて時々、句會を開く。部下としてはさういふ會へ顔を出した方が仕事の上でも都合がいいといふので、皆俳句を作りはじめる。かういふ例は好くある。さういふ動機から俳句にはいつたとして悪くはない。但し、句會に出て上司の御機嫌をとるだけに終つたのではつまらない。其課長が轉任したらば、後に残つて句を作る者は一人も無くなるだらう。これは皆うきぐさのやうな根の無い人達である。誘はれる風のまゝに寄つて集つただけである。一時遞信省には上部に俳句好きの人があつたので、大分に俳句が流行したと聞いた。爲替關係の課に句會があつて、カハセをもじつてカハセミの會といふ

名だといふ。句會は互選をして、高點の句には課長から賞品が出るので、皆喜んで出席する。此句はマヅイとて課長から叱られるが、仕事の上で叱られるより氣がラクでいいと云ふ。課長の句は賞讀しなくてはならぬが、俳句はどんな風に賞めたらばいいのかと、私の所へ訊ねに來た人がある。其人は、義太夫を聞かされるよりもすつといふですよと云つてゐた。私は、これを笑つたり、ひやかしたりするのではない。部下の若い者がカフェーに行く時間を引きとめて、句會をする、平生は事務机を隔て合つてに、がきつてゐる人達が圓く胡坐をかいて俳句の世界に遊ぶ、これは局内親和の一助となることに違ひない。決して悪い事ではない。だが、初めは斯様にただおつきあひに作るといふことが動機となつて、それから俳句の味を覺えて、ほんたうに俳句の道に入つて貰ひたいものである。課長の爲ではなくて「自分の爲」のものだとして作るやうに、大勢寄つた時だけ作る、「遊び」のものでなくて、「結局は自分獨りでするものだ」といふ事が解つて貰ひたいものである。昔は——と云つて、私の少年時代には——懸賞俳句といふものが大さう盛だつた。尾崎紅葉が存命で、讀賣新聞紙上に「金色夜叉」を連載してゐた時分、紅葉竹冷共選にして一

句二百圓の懸賞があり、大さうな人氣だつたものである。「新小説」「文藝俱樂部」など、いづれも懸賞俳句が評判をとつてゐた。キングが創刊當時、百圓の賞を掲げ、其時は私が第一回の選者をつとめたが、投稿は文字通り山をなして、編輯部から毎日一回届く小包が私の書齋を填めてしまふ有様、こちらが悲鳴をあげざるをえない。當時一錢五厘の葉書一枚が百圓になるといふのだから、富圖以上の興味をそるものも無理がない。地方に行くと月並連中といふものが今日でも相當に残つてゐるだらう、長野縣と神奈川縣とに多いやうである。これは一句に一錢とか二錢とかいふ入花料を添へて、宗匠の許に送る。一等(天)二等(地)三等(人)及び五客、十客などいふ名の許に、入選した人達に、自轉車、時計、反物、萬年筆などの賞を出すのである。祭禮の時には、献額やら献燈やらを作つて社頭に掲げたりする。甚だたあいのないものだけれども、昔は——今日でもさうであらうが——地方の農村には青年の娛樂といふものが殆ど無かつたのだから、骨牌遊びに金を賭けたりするよりも、かうした月並俳句に興じてゐる方が無難なのである。だから、これを頭ごなしに排斥するにも當らないことである。たゞ、俳句といふものは、それが目的のものではない